

ジリジリ……、

社内には差し込む日もそろそろと傾きかけた頃合に、滅多に鳴ることのない電話機のベルが鳴り響いた。暇潰しに広げていたカストリ雑誌をぼいと放り投げ、二度目のベルが鳴る前に受話器を手に取り応対に出る。

「はいはい、こちら鳴海探偵社……嗚呼、はいはい。お久しぶり、どうしたの」  
何か困ったことでもあった、

借金の督促だったら厭だなあと思いつながら出てみれば、其れは久しく連絡を取っていなかったとある人物からのもので、自分と同じく様々な方面に顔の利く有能な彼とは現役時代からの付き合ひだが、自分が斯様な立場となった今でも其れは変わらず続いている。互いの立場というものを弁えているが故に、自らの不利益とならない限りは相手の事情にも深くは立ち入ってこない男であるからこそ、此の持ちつ持たれつといった関係を続けていられるのだが。とはいえ、最近はこのこと目立って面倒な依頼を持ち込まれることも無かつたお陰で、自然連絡を取ることの無かつた彼から態々電話がかってきたのだ。さては何か面倒事でも起こつたかと思ひ自ら尋ねてみた訳だが、しかし電話口の向こうからは軽い笑い声と共に否定の言葉が返つてきた。

『なあに、此処最近は何分と暇そつにしているらしいと人伝に聞いたのでね。どうだい、これからひとつつ銀ブラとでも洒落込まないか、』

いい女がマダムをやつてる店を見つけたんだ。

上機嫌に誘つてくる彼の言葉を聞いてははあ、と得心した。

「なんだい、お前さん。そのマダムとやらと懇ろになりたいつて訳か、」

ずばり言い当てるやると電話線を通じて相手がひどく慌てている様子が伝わってきた。目に浮かぶような其の雰囲気は、はははと遠慮なしに笑ってやると、彼は動揺した口ぶりのままどうしてと問いかけてきた。

「どうしてつたつて、そりゃあ分かるさ。何せお前さんときたら、昔っから気になる女が居ると直ぐ俺をだしにして相手の気を引こうとするじゃないか」

否定したくともしきれないのか。相手はむつと唸つたまま何も言わなくなった。もう少し押揃つてやりたい気もするが、機嫌を損ねられることは本意ではない。

「冗談冗談、そうむくれるなつて。で、其処はどういった店よ」

自分の軽口はいつものこと、と諦めでもしたのか小さく溜息をつく音が聞こえた。

『……モダンなカフェだ。無論、アルコホルも置いてある』

「いいね。今日のところは急ぎの依頼もないし、これから直ぐに出るよ。待ち合わせは何時もの所でもいいかい、」

『ああ、そうだな。前みたいに道草して遅刻するなよ』

探偵業を始めてから何かにつけて周りから声をかけられ、相手をする内についての約束の時刻に遅刻してしまつて自身を先程の仕返しとばかりに当てこすられた。苦笑を浮かべながら了解と答えたところで電話が切れた。がしやり、と音を立てて受話器を戻し、腰を上げながら右斜め前方の手摺付近に腕を組んで佇む少年へ向かつて声をかける。

「ま、そついう訳だ。今からちよつと銀座に行つてくるよ」

「お帰りは」

それまですつと沈黙を保ち続けていた少年は初めて口を開き、帰宅時間を尋ねてきた。勤務時間内に何事か、といった類の小言を口にするのはとくに諦めているらしい彼の問いにつつん、と小首を捻りながら答える。

「どつだろつなあ……。あいつらがつまいいこといい雰囲気になるようだったら、早めに切り上げて帰るつもりだし。夕食はとりあえずいいよ、どつちにしる食つてくるから」

「いえ、用意しておきます」

気を利かせたつもりの科臼があつさりと退けられ、疑問を面に浮かべて少年を見遣れば至極当然の口調で返された。

「節約の為です」

少年に帳簿を任せてから暫く経つが、こついったことにまで気を回されるようになったのは全くの計算外であつた。あ、うーと呻きながら何とか言い返そつと試みるも、最後には其の間中自分をひたと見据えてくる少年へ向けて両手を掲げ白旗を振るより他無かつた。数字は偽ることが出来ないのだから止むを得まい。

「分かつた、分かりました。……けど本当に遅くなりそつだつたら食つてくるからな」

大人にはお付き合いつてものがあるんだし、そつ言い添えて反応を窺つ。

「承知しております。では、お気をつけて」

見送りの挨拶を口にした少年は腕を組んだ体勢のまま再びその眼差しを伏せた。

良く言えば物分りのいい、悪く言えば随分と素つ氣無い其の態度に慣れてきたとはいえ、もう少しどうにかならんものかなあ、と思いつつも帽子を手に取り、それじゃ行つてくるよと声をかける。行きしなにソファで微睡む黒猫の頭をさらりと撫で、唸り声を上げられながら爪を立てられる前にそくさと扉の隙間から身を滑らせた。

「全く。お気楽な人だな」

彼の靴音が遠ざかり、一階の扉が開閉する音を確かめた上で溜息と共にそう洩らせば、目付けの黒猫はその大きな耳をぴくりと動かしこちらへと翠の双眸を向けたよつだった。

「……そつだな」

何かにつけて小言の多い黒猫のこと、即座に同意を示す言葉が返されるものだと思つてはいたのだが、実際には妙な間合いを空けられ、訝しんだ。

「お前の見識は違つても言つつか、」

「いいや、違わぬよ」

振り返つて問い質してみれば、黒猫は其の身を起こし伸びをしながら更に続けた。

「《鳴海》という男は確かにお気楽な道楽者だ。お前が見た通りの、な」

含みのあるその物言いに更に眉宇が奇る。どつという意味だ。

考え込んでしまった自分を見遣り、黒猫は表情の読め顔つきで口を開いた。

「まあそう深く考える必要はなかるう。少なくとも今は未だ、な。実際、あやつのごうたらぶりに閉口させられるのは、紛うこと無き事実だし」

ひらりとソファーから音も無く飛び降り、こちらへと歩み寄ってくる黒猫の姿を目で追いながら確かに、と彼の意見に頷いた。

「それはそうと、今晚はどうするつもりだ。何時に帰ってくるか分からん男も居るんだ、冷めても食せるようなものなどあったか」

差し迫った問題に頭を切り替え、買い置きをざつと脳裏に思い浮かべる。

「……まあ何とかなりそつだ。何時も通り五時を過ぎたら支度にかかるよ」

「ご苦労なことだなと呟き、黒猫は主の失せた椅子にひよいと飛び乗って毛繕いを始めた。

「はあー。……ちよつと遅くなつちまつたかなあ」

左手首に巻いた外国製の腕時計をちらりと見遣り、針の指す数字を眺め思わずぼやいた。

彼に案内された其処は、幾分小振りでありながらもモダンなカフェ、と称された通り落ち着いた雰囲気の良い店であった。ボックスに腰を下ろしワインを片手に、からりと揚がった鰯のフライと芋のふかしたのにバターが添えられた一品を肴として軽く数杯やっていたところで漸く挨拶に現れた件のマダムは、少々年嵩ではあったが確かに肉付きのいいなかなかの美人で、成程これは彼の好みだと納得できる女性だった。また平日であるが故に他の客の入りも少なかったことから、マダム自身が自分たちの卓へ着き相手をしてくれたのは奴にとって実に幸運であったと言えよつ。

現役から退き探偵業を始めたばかりの頃は、己が周辺の異変も含めて、どうしても詮索してしまいがちな相手の先手を打つために自ら積極的に連絡を取り、色々と付き合つて話をしたものだが、少年を引き取つてからというものは、すっかり無沙汰になつてしまつていた。そういった諸々の不義理の侘びも込めて、色々と仲を取り持つてやり、いい雰囲気になつてきた頃合を見計らつて席を立つたという次第だ。無論引き止められはしたが双方とも本気ではなからうと、そう察することが出来るくらいには自分は朴念仁ではなかつた。

にしても、人をだしにすぎだあの野郎

不機嫌になりながら先程のことを思い出す。

聞いてくださいよマダム、こいつときたらつい先日引き取つたばかりの、十幾つにしかない子供相手にすっかり事務所内を仕切られてしまつてねえ。こつして帰宅の時間までも決められて、文句をつけるでもなくはいはい仰せの通りにと、こつ従つてゐる訳ですよ。いやあ全く日本男児として情けないも程があります、といった科白を立ち去り際に耳にした時には流石にむかつ腹が立ち、取り出しかけていた財布を素早く元の場所に仕舞い。近寄つてきた女の子に勘定は全てあいつにツケるよつと伝えてそそくさと店を後にして。其処から電車に乗つて筑土に着いたのが十時を過ぎた時刻であつた。

電信柱の上から時折ジジ、という音が響く他は、すっかり静まり返つてゐる。明かりがついてゐる店といへばちよつとした飲み屋ばかりで、殆どの民家の窓は真つ暗だ。そんな長閑な静寂の中で微かに響く己の靴音がやけに耳障りだつた。音を完全に消してしまつ歩き方の心得も当然あつたが、た

かがこれしきのことだと思つと其れもまた億劫であつたので、結局そのままだらだらと歩き続ける。角を曲がり暖簾の下げられた金王屋の前を通り過ぎ、川のせせらぎが耳を打ち始めるとやがて自らの靴音も気にならなくなった。

てれてれと歩きながら、出しなに少年と交わした会話が脳裏をよぎつた。

彼はもう休んでしまつただろうが、若し起きていたとしても、疾つに自室に戻つてゐるだろう。留守を預けたとはいへ、そうしてしまつには充分な時間だ。たとえ世間を納得させる為の仮初の身分であつたとしても、少年には師範学校に籍を置く学生としての生活も存在している。当然のことながら課題も出るし授業にも出ねばならない。生真面目な少年のことだ、屹度今頃は自室で勉学に励んでゐることだろう。

そう思いながら顔を上にあげたその時、目に飛び込んだのは、探偵社の窓から漏れ出でる暖かな明かりであつた。

真つ暗な夜道に、やけに輝いて見える其の煌々とした光に目を奪われた。

思はず足を止めじつと見入る。たかが明かり一つで心動かされている今の自分が、理解できなかつた。

しかし此処で突つ立つていても仕方が無い。

明かりが点いているといふことは、少年が未だに彼処にゐるといふことを示している。ならば自分はさつさと帰つて、彼を留守番から解放してやらなくてはならないだろう。

ステップを登り一階のビルジグ入り口の扉を開け、階段を上り始める。薄暗い廊下をこつこつこ

つ、と靴音を響かせながら歩き、扉の把手に手をかけ、開けた瞬間、飛び込んできた明るい光にらしくもなく目が眩みかけた。ぱちぱちと瞬きを繰り返しながら社内を見渡せば、少年が衝立の奥から姿を現す。

「お帰りなさい」

「あ、ああ。……ただいま」

少年は未だに学生服を纏ったままだった。夜着ではない姿に少々驚く。

「お前未だ風呂に入っていないのか、もう十時を過ぎているんだぞ」

「何時頃帰宅なされるか分からなかったものですから。俺は助手の身ですし、先に湯を使つわけにはいかないでしょ」

「そんな、だからつてお前、もうこんな時間なのに」

「尤もな意見ではあるが其れにしたつて、律儀すぎる其の言い分に思わず呆れる自分を他所に、少年は平然とした面持ちで口を開く。

「もうこんな時間ですが、何かお食べになられますでしょうか」

自分の語尻をなぞつた科臼に帽子と上着を脱ぎながら答える。

「いや、少々奢つてもらつたからあまり。……うん、味噌汁があるなら欲しいかな」

「では暖め直しますね」

そう言つてキッチンへ引つ込もつとする少年を追いかけ慌てて声をかける。

「ああ、いいつて。それくらい自分でやるから、お前は早く風呂へ入つて休みなさい」

「しかし」

「一番風呂も二番風呂も、順番なんて俺は気にしないから。これからは夜　そつだな、八時を過ぎても戻らないようなら先に風呂は済ませておけ。これは所長命令だ」

タイに指を引つ掛けて緩めながら少年へ近付き、それでも未だ納得のいかなさそうな少年を困つた顔で見下ろす。あーうと呻き頭をかき混ぜ、更にいいなと念を押しと少年はしぶしぶ承諾の意を示した。

ペーパーの時代にすら少年のような生真面目さを持ち得なかつた自分には、彼のこのようなところが妙に扱い辛い。だが決して不快感を伴つこともなく受け入れる気分にさせられるのは、其れがひとえに世間慣れしていない少年の思考回路が、自然とそうなつてしまつたのであるつと感ぜさせられる為であつた。

全く変に無垢つてのは最強だよな　と思いつつ辺りを見渡せば、普段少年の傍らに常に控えている黒猫の姿が無い。一体どうしたのかと尋ねれば、少年は鍋をガスコンロにかけ燐寸に火を点けながら先に休みましたと答えた。

「猫の身体は人よりも長い休息を欲するものですから。ではお言葉に甘えて、先に風呂をいた

だいて参ります。沸騰する前に火から降ろしてくださいね」

「分かつてるつて。悪かつたな遅くなつて」

「いえ、此処で待つことを選択したのは俺自身ですから」

少年は一礼してその場を後にした。これから自室に戻り、言われた通り先に風呂に入って休むのだ

るつ。そういえば社内卓上に教科書たの筆記帳たの辞書たのが置いてあつたのを思い出した。嗚呼、やっちまった。

コトコトと鍋から音が響き始め、蓋を開けるとふわわりといい香りが立ちのぼる。具はどうやら茄子と玉葱。味噌は少年の好みで麴の多い田舎味噌となっている。帝都では赤だしと呼ばれる類の方が多いのだが、上方出身の任侠と親しくしているうちに、少々甘めの味付けにも慣れた自分には左程抵抗無く受け入れられた。

卓上に椀と箸を置き、椅子を引いて座る。いただきます、と誰に言つとも無く呟き、箸と椀をそれぞれ手に取りかき混ぜる。皮を剥かれ細長く切り揃えられた茄子と薄切りの玉葱が麴と共に漂つ其れをゆつくりと味わつ。……うまい。

和食作らせたと言つことないよなあ、と感心しながら同時に思いを馳せるのは、あの時、明かりの点いた探偵社の窓を見ただけで何故変な気分になつたのかということ。

初めて味わう気分ではない。それだけははつきりしていた。では、先程と同じ気分を味わつたのは何時のことであつたのだろうか。茄子を口に運びながら順々に思い返す。

毎日がある意味刺激的であつた現役時代には、一切感じることが無かつた類のものであるように感じられた。では陸士か、と考へてみて即座に首を振る。駄目だ、話にすらなりはしない。中央幼年学校時代も同様の理由で却下だ。

残るは軍と関係の無かつた時の話となるが、少なくともあの少年を引き取るまで、自分は此処へ誰も連れ込んだことは無かつた。気にかかるのはあの任侠の存在だが、彼に会いに行くのにそついった

△ト感滿載な演出など有り得なかつた。

やつてみたいと思わないでもないのであれども。

ずず、と味噌汁を嚙る。

だつていい反応返してくれそうだし。

件の任侠に知られようものならまたお叱りの言葉を頂いてしまうのであろうことを懲りもせず考えながら、そのままする、と行儀悪く音を立てて味噌汁を飲み干した。椀の上に箸を置き、洗い場に運ぶでもなくそのままに捨て置いて肘をつきながら考え続ける。

はて、それでは残る可能性といえは幼年学校へと入る前、つまり二十年近く前の頃ということになるが、それはいくらなんでも昔過ぎやしないだろうか。

むむつと唸りながら考え続けていると力チャリ、と把手が回り扉が開いた。振り返ると夜着である浴衣に着替えた少年が立っている。

「どうしたんだ」

少年は返事を返す素振りも見せず、無言で室内へと足を踏み入れた。近付いた彼から石鹸の香りと湿り気を帯びた僅かな熱気が漂う。

「おいおい、早く部屋へ戻らんと湯冷めするぜ」

ひんやりとした夜風は身体の熱を容易く奪っていく。風邪でも引かれてはかなわない。

己が身を案じる言葉を吐いた自分へ向かつて少年はちらりと学帽の下から視線を寄越し、手を伸ばして卓子の上に置き去りにされていた椀と箸を掴んで洗い場へと持っていく。糸瓜を手に取り、水

で洗い流しながら口を開く。

「大方、片付けもせずに、部屋へお戻りになるのだからと思いましたが」

洗い終えた椀と箸を水切りの上に据え、台拭きを濡らして固く絞る。徐に振り返って、失礼しますと口にして卓子の上を拭き始める。その一連の慣れた動作を見詰め、嗚呼そうか、と一気に腑に落ちた。

そうか……矢張り子供の頃の。

其の頃の自分には、親から授けられた名しか存在せず。暖かい家族に囲まれて幸せに過ごしていた。帰るべき家があり、待つていてくれる誰かが居て、其処はとても安心できる場所。こんな自分

にも、確かに、そんな時代があったのだ。

しかし忘れてしまつていたのも無理も無い。父を亡くし母を亡くし、抛り所全てを失い。幼年学校へ流れ着いてからは、安らぎという言葉とは程遠い生活を強いられてきた。忘れてもせねば耐えられなかっただろう。

陸士へ上がったも気は抜けなかった。いくら庇護されていたとはいえ、矢張りどうしようもない莫迦というものは存在するもので、隙を見せることなど一切出来なかった。現役時代ともなれば晴れて個室を与えられたが、それにしたつて待つてくれる人なんてものは夢物語でしかなく、明かりが点いていれば、其れは即ち歓迎せざる訪問者が其処に居るといつことを示しており、却つてどの時よりも緊張せざるを得なかった。

ただ此処はそうじゃない、こいつもそついつた意味で警戒すべき対象ではない。

私的空間を侵略されるようなことがあれば即座にお灸を据えてやるつもりではあるが、今のところはそのような気のすすまぬ行為に手を染めることも無く無事平穩に日々を過ごしている。尤も、其の理由として一番に挙げられるのが、自分がそいつの意味では勿論、あらゆる興味をかきたてる対象として少年に見られていない、ということにあるあたりが、何とも言えず複雑な心境にさせられるが、そもそもが男同士。上司と部下の枠を超えない今の状態こそが、一般的な、本来あるべき関係なのだから。

先程の言葉や外出時にかげられた要請に象徴されているように、少年からは出会った当初のような他所他所しさも次第に掻き消え、自らの意志を明確に伝えることも多くなっている。時としてちくりとやられることすらある今の状態は、過干渉を殊の外嫌い、それでいて円滑な人間関係というものを尊ぶ自分としては願っても無い距離感で、其れはどちらかと言わずとも居心地の良い歓迎すべきものである。

あの時、たとえそれが仮初のものであっても、我が家とも言える探偵社に明かりが点つていたのを目にした自分は、これといって警戒する必要のない人物が、其処で自分の帰りを待っていてくれているのだということを知り、久し振りに味わう心地良い感覚に、思わず呆けてしまったということなのだろう。

なんともまあ、俺としたことが随分とセンチメンタルだねエ。年なのかしらん。

くくくく、と突然笑い出した自分を少年が不審けに見遣っているのを感じ、慌てて笑いを引っ込めて少年へ向き直る。

「嗚呼 濟まなかつたな。ありがとうライドウ」

「いえ、それでは俺はもう休ませて頂きますのでこれで失礼しますが、所長も早くお休みになられますよう」

「分かった分かった。……んでも所長呼ばわりは堅苦しいなあ、他の呼び方って無いの」

「……それも所長命令 という訳ですか。 了解しました。何か適当なものを考えておきます」

「よろしくー」

ひらひらと手を振った。

年が倍ほども違つ男の我儘を、溜息をつきながらではあるが黙って受け入れた少年は、ではお休みなさい鳴海さん、と一礼して就寝の挨拶を口にしてキッチンを後にした。

ちよいとはかり弾引だったかなあ、と思わないでもないけど、まあ受け入れてくれたことだしよしよし。

既に逆らつ程の気力も無い程に呆れ返られているのだという可能性は意識的に向こうへと追いやり、弾引に自らを納得させた。

そう《鳴海》とはこのよつな男なのだよライドウちゃん。お前さんが晴れて独立できるその日まで、頑張つて付き合つてくれよな。

自らの匙加減一つでどつにでもなるつ、少年がこれから背負わされる羽目になる苦勞を思い浮かべ、にやにやとした笑いが洩れた。いけない、どつにも浮かれているよつだ。

それにしても本当に律儀な子だ。まさか風呂にも入らず自分の帰りを待ち続けるとは。

自らの予想の範囲を軽く通り越した少年の生真面目さに、これはそうそう迂闊に夜遊びは出来そうにないなと思ひ悩む。今日のところは先に風呂に入る許可を与えたからいいものの、次は次でまた何か些細なことに気を遣い、延々自分の帰りを待っていていそうな気配が存分に感じられ、困り果てた。

全く。なんて子を寄越してくれたんだ、葛葉さんよ。

そうぼやいてみても時既に遅し。当代ライドウはあの子がきっちり背負ってしまったているのだから仕方が無いだろう。自分に出来ることといえば精々、遅くなるようであればそ言い置いておく程度か。夜遊び自体をやめてはどうかという意見もあるだろうが、其れは自分が耐えられそうにも無いので却下した。

面倒なことになったと思つものの、しかし決して不愉快にはなれないことに奇妙なくすぐたさも感じてしまつて。田舎の山奥から帝都へ出てきて決して浮つくことの無い少年にも、らしくないことに浮かれる自分にも、嗚呼本当に仕方ないなあと思ひながら、就寝前にシャワーのひとつも浴びてこようと腰を上げ、すっかりしまりやさんになってしまった少年に叱られないよう、明かりを消し確りと戸締りをして、廊下へと足を踏み出した。

注：適当……『大雑把』ではなく本来は『程よく』という意味。